

氏名（本籍） 坂本 光太（山梨県）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 甲第14号
 学位授与年月日 令和3年3月19日
 学位授与の要件 学位規則第3条第3項
 学位論文題目 ヴィンコ・グロボカール作品における
 美学的・社会的システム批判としての体系化と逸脱
 —— 1970年代前半の「転換点」前後の3作品《レス・アス・エクス・
 アンス・ピレ》、《エシヤンジュ》と《変わらない一日》の
 比較によるその手法の分析 ——

学位論文等審査委員

（総合審査）	委員長	教授	吉成 順
		教授	加藤 一郎
		教授	雲井 雅人
		教授	永峰 高志
		教授	古川 聡
		准教授	三浦 雅展
（演奏審査）	委員長	教授	吉成 順
		教授	雲井 雅人
		教授	永峰 高志
（論文審査）	委員長	教授	安元 弘行（元東京都交響楽団チューバ奏者、 元愛知県立芸術大学教授 学部長）
		教授	山本 訓久（指揮者、東京学芸大学教授、 国立音楽大学非常勤講師）
		教授	吉成 順
		教授	加藤 一郎
		准教授	三浦 雅展
		福中 冬子（東京藝術大学音楽学部楽理科准教授）	

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者坂本光太（博士後期課程器楽研究領域）の学位審査修了リサイタルならびに学位申請論文に関して厳正な審査を行った。以下に、1. 演奏審査、2. 論文審査、3. 総合審査、に関する所見を記す。

1. 演奏審査

修了リサイタルは2021年2月19日12時から行われ、スロヴェニア系フランス人のトロンボーン奏者／作曲家であるヴィンコ・グロボカール（Vinko Globokar、1934-）の作品が2曲演奏された。それぞれ、グロボカール自身が「転換点」と呼び、学位申請論文でも重要な鍵となる時期の前と後を代表する作品である。

第1曲《レス・アス・エクス・アンス・ピレ Res/As/Ex/Ins-pirer》(1973)は転換点の前、「音楽に関する音楽」と位置付けられる。「管楽器演奏の吸気／呼気を、弦楽器のアップ／ダウンボウになぞらえて、金管楽器演奏に弦楽器のような音の連続性を与える実験」(申請者)であり、金管楽器の呼吸法や(いわゆる)特殊奏法を駆使した作品で、申請者自身のチューバ独奏で演奏された。特殊奏法については安定し卓越した技術があり、提示される音や息の連なりに自然なエネルギーの流れが感じられて、飽きることがなかった。技術的にも解釈の点でも十分練られており、「かつての前衛が今や古典になった」という感想を抱かせるほど完成度の高い演奏であった。

第2曲《変わらない一日 Un jour comme un autre》(1975)は転換点後の「政治参加の音楽」を代表する約50分の大作である。1972年にトルコで起きた拉致・拷問事件の告発文に基づく「ソプラノと低音楽器アンサンブル、照明と音響のためのシアター・ピース」で、「ソプラノは犠牲者の女性、打楽器は拷問官」という具合に各パートには役割があり、申請者は「法律の愚鈍さ」を表すチューバのパートで参加した。ソプラノをはじめとする6人の演奏者の技量は達者であり、照明や音響を含む演出も巧みで、完成度が高く練り上げられた良質な上演であった。特殊奏法の合間に聞かれるチューバの「ノーマル」なフレーズは美しく魅力的で、申請者の高い資質を十分感じることができた。

「技術的な完璧さが、初演当時に作品が持っていた衝撃や斬新さを減ずることになっているのではないか」といった指摘もあったが、作品への理解の深さやそれを十分に表現できる技術と音楽的能力は疑いようがなく、審査員全員の合意で合格と判定した。

2. 論文審査

学位申請論文『ヴィンコ・グロボカール作品における美学的・社会的体系批判としての体系化——1970年代前半の「転換点」前後の3作品《レス・アス・エクス・アンス・ピレ》、《エシヤンジュ》と《変わらない一日》の比較によるその手法の分析——』は、グロボカール自身が創作上の「転換点」と呼ぶ「音楽に関する音楽」から「政治参加の音楽」への変化が、具体的な音にどう現れているか、を分析によって明らかにしようとするもので、全5章、200ページにわたる労作である。

グロボカールの音楽はこれまでの現代音楽史記述において、特定のキーワード(「即興演奏」、「特殊奏法」、「音楽のシアトリカルティ」など)の枠組みにおける代表的事例として参照されてきた一方、彼自身の創作の通史が俯瞰的な視点から検証されることはほぼなかった。彼の創作史上に戦略的な「転換点」を見出し、それを通じてグロボカールの創作の背後に見出されるべき音楽的・外音楽的文脈を考察することを目的とした本研究は、その意味で非常に意義深い成果をあげていると言える。

とりわけ、グロボカールの初期の作品からすでに特徴的だった奏者の身体の特異な使用が、「転換点」以降、より具体的な社会的・政治的メッセージを持つものとへと変容したという申請者の仮説は、説得力を持つものである。

アドルノやサルトルらの思想を踏まえている一方、師ベリオとゆかりの深いエーコらイタリアの思想家・文学者たちからの影響への言及が薄い、といった点で物足りない点もあるものの、全体として博士課程の研究成果と呼ぶにふさわしい結果を出しており、高く評価されるべき論文であることから、審査員全員の一致で合格と判定した。

3. 総合審査

申請者は自らの確固たる信念と関心に基づいて研鑽を積み、学内外での演奏活動や学会発表なども積極的に行なってきた。演奏審査・論文審査ともに評価が高く、「自律して演奏会を企画し、説得力ある演奏を行うことができる」「自己の演奏や創作を進展できる研究ができる」という本学博士後期課程のディプロマポリシーにふさわしい。また、本学における TA 経験や他大学における教員経験もあり、「高等教育機関において教授できる」という条件にも十分該当する。以上のことを総合的に評価し、「博士（音楽）」 Doctor of Musical Arts の学位を授与するに相応しいものと判定する。